

・製本と保存を考える・ コデックス通信

第7号目次

「IFLA資料保存の原則」	13
保存製本とはなにか ニコラス・ピックウッド	13
(解題と訳注 木部 徹)	
図書館の修復現場から(4) 久芳正和	20
製本用接着剤について(3)-膠- 鈴木英治	22
インフォメーション	23

「IFLA資料保存の原則」(ジャンヌ=マリー・デュロー、デビッド・クレメンツ著/資料保存研究会 訳・編)はA5版64頁、定価 750円。書店を通して注文するか、日本図書館協会より直接入手することができます。

〒154 東京都世田谷区太子堂 1-1--10
社団法人 日本図書館協会 ☎ 03-410-6411

(なお1979年版「原則」は、コデックス会に金谷博雄による全訳があります。郵送料共で 250円。切手可。)

「IFLA資料保存の原則」

IFLA(国際図書館連盟)事務局が1986年4月に刊行した「図書館資料の保存と保護のための原則」(“Principles for the preservation and conservation of library materials”)の日本語版が出版されました。1979年にIFLA保存分科会が発表した「図書館における保護と修復の原則」を改訂したもので、《資料保存研究会》が翻訳と編集を担当し、日本図書館協会から刊行されました。1979年版「原則」が、金谷博雄によって訳されるまでの長いあいだ無視され続けていたことを思うと、隔世の感があります。

3つの部分から構成されています。I. 「図書館資料の保存と保護のための原則」(1986年)、《参考》「図書館における保護と修復の原則」(1979年)一部分訳、II. 改訂版「IFLA資料保存の原則」の特質と意義・安江明夫。

すばらしい翻訳で読み易く、安江氏の解説は、今回の改訂に至る背景や反対論への評価を含んでいて、非常に参考になります。すでに、「原則」の内容をアンケート項目化して、日本の図書館における保存の実情調査が行われており、10月の全国図書館大会で中間報告がなされることになっています。一人でも多くの人がこの「原則」を読み、それぞれの現場での活動に生かしてほしいと思います。

奥付けには「本文の用紙は中性紙」とあります。pH試験紙で調べると、本文紙は7.5、見返し用紙は6.0付近を示しました。背を糸でとじているのには、好感がもてます。



保存製本とはなにか

ニコラス・ピックウッド

最近開かれたセミナーでのことだ。ある図書館人がつぎのように報告した。「うちの図書館では、保存の問題はすべて館内の製本家に任せてあり、わたしが、どの本にどんな処置が必要かを製本家と話し合うなんてことはしない」。

この言葉は、図書館における保存業務のなんたるかを知らぬ危険性ばかりでなく、図書館人の側の信じられないほどの傲慢さを示す格好の例であるといえよう。「保存(Conservation)とは製本のこと」ではない。保存はもっと複雑な概念である。もちろん具体的な補修作業を含むが、それが製本というのではなく、製本を必要としない保存もあるということはこの図書館人はご存じないらしい。図書館の保存業務の遂行のために必要なのは、製本のための高い水準の工芸的な技量だけではない。同時に、書物に対しての適切な歴史的・美術的な認識と知識を持たなければならず、配架や利用等の図書館の一般的な業務内容(書物がどのように保管され利用されるのかを知らずに補修はできない)を理解しなければならない。そしてさらに、モノの劣化はなぜ、どのように起こるのか、それを防ぐために使う材料はどのようなものが適切であるのか—こうしたことを理解できるだけの化学的な知識も必要だ。

だが、以上あげた事柄よりももっと重要なことがある。保存実務にたずさわる保存技術者（コンサーバター）〔注1〕と図書館スタッフとの意志の疎通である。両者が前向きに情報を交換することだ。なぜなら図書館でのあらゆる事柄が、図書館を図書館足らしめているもの—すなわち書物—の保存に関わってくるからだ。図書館での保存（Conservation and Preservation）〔注2〕政策の遂行は、作業台に縛りつけられた技術者にのみ任せられるということになったら、政策そのものが意味のないものになるのは必至である。保存専門家が、日常の適切な書物の取り扱いの決定に関与するようにならなければいけない。問題の多い建物の設計や配架、そして劣悪な展示が原因となって引き起こされた書物へのダメージを回復してくれと保存技術者が頼まれたときは、すでにダメージが決定的なものになっており手遅れということが多いのだ。そして優秀な保存技術者ならば、以上あげた問題を良く知っているし、どのような配架や取り扱いがいいのか訓練されており、要請があれば有効な手助けができるものだ。

ところで、製本家が即保存製本家ではないことを言うところ。世に製本の技術を持つとはあまたいるが、言葉の本当の意味での保存製本ができるほどの数は限られてくる。同じ「製本家」でも異なったタイプが存在することを理解することが、図書館での効果的な保存計画の開始にあたって不可欠だ。何故に異なったタイプの「製本家」が出て来たのか、これを理解するには若干の歴史的な寄り道をしなければならないが、しかしそれによって、「商業」（trade）と「工芸」（craft）ということばにつきまとう用語上の混乱を解きほぐすことができる。この二つの用語はしばしば実に不正確に使われてきた。また商業的な製本家は工芸的な製本家を馬鹿にし、後者は前者を馬鹿にするといったことがあるために、専門家ではないひとが自分に提示される両者の仕事の何がどのように違うのか、判断がつかかねるといった問題を生じさせることになった。

両者の相違は印刷技術の開発とともに発生した。書物が手で書かれていた時代には、製本家は製本工程の全てに関わり、これによって本というものを丸ごとそっくり掌握できた。ひとつひとつの本にどのような別個の手当てが適当かを判断で

きたし、極めて水準の高い工芸的な配慮により、その本にもっとも適した材料や構造を選択できた。それによって当時の製本家は、書物を書物足らしめているもっとも大事な部分である本文を傷めることなく、いつまでも丈夫で長持ちする本を創造できた。まさに製本は本の保存であったし、真の保存製本がそこにあったといえよう。仕上がりを綺麗に見せることは二の次だった。

だが、16世紀における印刷技術の普及により、製本家はつぎの二つの影響をもろに受けることになる。まずひとつは製本しなければならない本の爆発的な増大だ。ふたつめは、印刷によって書物の本体が別個に作られるようになったことだ。本体を、他の製本業務と切り離して製作できる—これは規格化された仕事ができることにつながり、また商売上からは実に好ましいことだった。結果としては製本家が工程を省くことになり、こうして本の構造的な水準は下落していった。19世紀にはすっかり普通になった工程の省略、たとえば綴じつけるのではなく本の中身の背に貼るだけの花ぎれなどは、すでに16世紀末には登場している。17世紀になると、折丁をバンドでかがってもいけないのに、できあがった本の背にはバンドが盛り上がっているように見せたり、ニカワで貼り合わせただけの本文さえ登場した。これらは、あたかも最上の製本が行われているかのように見せ掛けるための小細工だ。ごく早い時期に、劣悪な構造の本がきちんとした構造の本に見えるように作られていた。なにより見た目がよければ良しとされた。もちろんこんな中でも、質の高い材料をつかった、耐久性のある構造の本は作られてはいた。それは現在にまで生き残った18世紀やそれ以前の沢山の書物から明らかである。しかし、技術進歩が劣悪なものを大量に作ることを可能にした時に、それまでなんとか続いてきた健康な書物は息の根を止められた。生産をスピード・アップすること、価格を下げること—絶え間ない圧力により製本構造の水準はさらに低下していく。ともかく見た目さえよければいい。厳しいコスト競争下に置かれた製本業者は、生き残るためには材料と構造をいい加減にするしかないわけだ。装丁の巧みさと裏腹に、本体から表紙が外れてしまった本—こうした19世紀末の本は、すでにわれわれにはお馴染みだ。そして現在、わたしたちの周りで作られている美術工芸製本といわれているものの大半が、この誤った技術を、あたかも伝統と錯覚して受け継いで

いる。質の良くない革をギン面近くまでバラバラにすき、その上に箔を押す。表紙と背とのジョイント部（表紙の外側でも、内側のノドの部分でも）は弱々しく、何枚も背貼りをしたために平らに開かなくなった本文。しかし図書館も含めた顧客は、こうした製本を明らかに黙認してしまった。外からの刺激がなくなった製本家たちは自分達のレベルを向上する努力をやめてしまった。製本のエキスパートが仕事にあたったのだが、こうした大手の製本業者では機能よりもむしろコスト面からの要請により、古い製本様式をそのまま踏襲することに、自分達の専門技能を注ぐようになる。製本所は分業による流れ作業で製本することで低コストを維持するようになる。もはやひとりの職人が一冊の本を作る全工程に関わることはなくなった。このため経済的には理にかなったものの、しっかりした技術理論に基づくルールはなくなり、製本技術は劣悪なものになっていった。個々の本にふさわしい製本の選択はますます限定されたために、構造の全体を掌握すべき製本家の平均的な技能水準は著しく低下した。これは、初期刊本の補修に深刻な影響をもたらすことになる。昔の本の補修に、現在の製本技術や構造を適用することになった。こうして狭い枠のなかに追込まれた製本技術と、材料の質の極端な低下とが結びついた時、現在の深刻な保存の対象となる本が生みだされる。今日の「保存」という仕事を生むために、当時の製本家達が努力したのだと思いたくなるほどだ。

コブデン＝サンダーソンが先導した、工芸技術の復活を目指す製本家達は、当時の美術工芸製本と呼ばれたものの質の低下に抗するかたちで登場した。そしてそれよりも昔の製本技術から、永続性のある新しい構造をどのように作るかを学んでいった。なかでもダグラス・コッカレルは、昔の健康な構造の本の復活に力を注いだひとであり、その後の製本技術の改良に決定的な影響を与えた。かれが1901年に上梓した『製本と本の手当て』（“Bookbinding and the care of books”）は現在もなおこの分野での不朽の名著のひとつである。だが、コッカレルは、こうした考えや実践を商業的な製本の世界に持ち込もうとしたのだが、成功を収めたとはいえない。W. H. スミス製本所でのコッカレルの試みは結局は成功しなかった。そして工芸的な製本技術は商業のそれとは別のものとして形成されていくことになる。コッカレルは

1930年代に中央技能学校（The Central School of Arts and Crafts）でも教えたが、商業的な製本を教える同僚からは白い目で見られた。

こうした区分けは馬鹿げており悲しいことだ。なぜなら、今日保存製本といわれるものが工芸的な製本の伝統から導きだされたからだ。（商業的な製本家はこうした伝統に関与できなかった。）書物の保存の原則はダグラス・コッカレルが先鞭を付け、シドニー・コッカレルとロジャー・パウエルによって発展させられた【注3】。1966年のフィレンツェの水害による書物の救済に貢献したのは、こうした工芸的な伝統から育った製本家であり製本技術だった。そして保存分野での重要な改革のほとんどが、この伝統のなかから生まれた。アメリカ議会図書館、ダブリン・トリニティ・カレッジ図書館、ボードレアン図書館、テキサス大学図書館等にある、今日の保存分野で先導的な役割を果たしている保存機関は、上記の工芸的な製本家達の努力によって設立されたものである【注4】。また1980年に開催されたケンブリッジ国際保存会議もおなじところを源としている【注5】。

こうした工芸的な製本技術は、美術工芸製本という狭い範囲だけを対象としたものではない。それは今日、本の保存技術として広く採用されている保存箱（Phased Box）、熱圧着紙（Heat-set Tissue）、ポリエステル・フィルム封入法（Polyester Film Encapsulation）などが、上記の保存製本機関から開発されたものであることを思い出せば分かることだ【注6】。極めて単純化して言うならば、こうした新しい保存の原則による書物の補修は、個々の書物の構造や状態そして将来の利用などに即して、技術的、歴史的、審美的な基準をあてはめていくということになろう。つまり今様の製本技術の枠にむりやり詰めこむことではないのだ。そして対象となる本が貴重書といわれるものだろうと、逐次刊行物のようなものであろうと、もしそれらが恒久的な保存の対象となるものだったら、おなじ保存の原則が適用されなければならない。なぜなら、必要とされる作業の質が事前にきちんと評価され、実際に手を動かす仕事にもっともふさわしいものであることは、全ての基本であるからだ。補修作業が、保存しようとしている対象の質そのものを破壊するというのならば、そんな作業はなんの意味もないし、これからずっと蔵書とし

で残しておくべき本が、どうやっても数年後にはバラバラになっていくものならば、そんな本を製本したり再製本したり補修しても意味はない。

他の何にもまして「質」が問われねばならぬというのはまさにここなのだ。使う材料、保存技術者の技量、どのような保存が適切かという判断—これら全てにおいて、高い質が維持されなければならないし、それが不可能というならば、書物の保存など時間と労力と費用の無駄というものだ。全ての保存作業において、高い質の達成と維持とを、あらゆるものに先行する基準として据えなければならない。生産性は基準にはならない。高い質が遂行され維持されるというならば、次に生産性を上げることを考えればいいのであって、この逆ではない。もし貧弱な質の仕事がおかまいなしにすめられたら、それは現在図書館が直面している問題をあつというまに増幅させるし、実際製本や補修を急がせればそれだけ問題はさらに悪い方向へすすむと思つてよい。これは多くの図書館で現実に行われていることだし、そこで行われている仕事は、わたしたちの後の世代にとって解決不可能な問題を積み重ねているといえるのである。

適切な質を達成するにあたって、まず最初に心がけることは、適切な質の材料のみを入手することであり、これのみを使うということである。もし製本家がこのような材料を入手できないというならば、保存にかける時間と金は浪費されることになる。だれでも昔の書物をみれば、その材料が優れていることはわかる。だがこうした質の材料は、現在では手にいれることが本当に難しくなっている。ほとんど毎月といたいほど、これまで良質の材料を提供してきた業者が店をたたんでいる（唯一耐久性のある牛皮として使われてきたものが、こうして最近消えた）。現代の手漉き紙も昔の紙のような強さはもはやない。業者は保存技術者の意向などおかまもなく、なんら相談も報告もなしに、扱っている材料の仕様を絶えず変更する。保存技術者は黙って渡されたものが以前と同じ質のものだと思ひ、それを使う。こうして知らずのうちに保存技術者は時間を浪費し、彼の雇い主は金を浪費することになる。安心して使える材料はますます少なくなっている。保存技術者はその本の重量や機能に則した構造を採用しよう

コ通sep87 2/2 16

としても、材料の手当てがままならないために、その技能を狭めざるを得ない。一方で材料のことならまかせてくれというエキスパートが払底しつつある。ために材料の詳細な仕様を書くことができなくなっている。もしわれわれがこうした状況を黙認し、業者からのあてがいぶちの材料を使いつけるならば、後に続く世代から感謝されることはまずあるまい。今回の『レポート』[注7]によると、調査項目へ回答を寄せたうち、自分のところで使っている保存用の材料に注意を払っている図書館は、わずかに19を数えるのみであった。つまり残る313の図書館—「すべての蔵書を恒久的に保存しようとしている」と回答を寄せた—は、平気で馬鹿げたことをやっていることになる。これらすべての図書館が協力し、適切な材料を確保するとともに、業者にたいしては、われわれの欲しいのはこういう材料なのだといひ、それに応えてくれる業者を積極的に支援する体制はできないものだろうか？

材料の質について述べたが、それと同様に極めて大事なのが保存作業の構築と実行の質である。それも、個々のきめ細かい手当てを必要とする本に対してと同じように、ある期間内に大量に製本しなければならない本についても、この質は問われることになる。もし本が適切に機能しなければ、その本の利用には無理が生じ、壊れることになる。たとえば図書館製本として多用されているクリート・ソーイングだが、この製本法は本の開きを非常に制限するし、恒久的な保存を目的とした本の製本法としては全く不向きだ[注8]。なるほど当初はいいかもしれぬが、折山が消滅し、しかもノドが本文近くまで裁ち切られた本を、再び修理したり再製本するのはとても難しく、かつコストがかかる。結局、クリート・ソーイングは保存技術としては認められない。この種の製本を適用する本のばあいには、あらたにクリート・ソーイングなどを使わずに、その本に現在採用されているその製本法になるべく近いかたちのもを適用し保存するのが良い。つまりクリート・ソーイングなどよりもっと良い製本法がある。それは「商業的な製本」と「工芸的な製本」とがともに協力しあう領域といえる。

貴重書の補修については、個々の本によってその手当ても異なってくるので、一般的な方法を語るのは難しい。また流

れ作業で大量に補修処置することもほとんどできない。しかし、その代わりに、完全なままで保存したい本の、利用可能な寿命を延ばすための、広範な保存手当て法がある。かつては貴重書の保存手当てといえば再製本と相場が決まっていたが（いや、いまでもそのように教えられている）、その代わりに現在は、簡単な補修をしたり、その本の脆弱な構造部を補強したりというような保存技術が採用されている。これは、その本のオリジナルの状態を損なわないし、将来再び補修が必要になった時に作業にかかる費用を高くする原因となる接着剤を使わない方法である。

『レポート』は、補修に代わる理想的な保存技術として、貴重書を箱に入れて保管することを勧めている。箱に入れる方法は、その本の歴史的な構造を損なうことなく、その本の起源と特徴とを残せる方法といえる。ここ数年のあいだに、英国の図書館のなかでも、洗練された保存箱を採用するところがいくつか出てきたが、これに追随していこうという図書館は数少ない。だが、すでに相当劣化が進んでいて傷みのはげしい、あるいは傷みやよくなっている本を延命するのに、コストがかからず、安全で、もっともいい方法はこれ以外にない。この場合の箱にもいろいろ種類がある。それ自体も恒久的な使用を目的とした、個々の本に合わせて作ったドロップ・バック・ボックスから、安くかつ早くできる簡単な構造のフェイスド・ボックスまで幅広い。特にフェイスド・ボックスはその名の通り、将来の恒久的な保存手当てを施す前に、そのまま放置しておいたのではやがて取り返しのつかないほど劣化してしまう本を、とりあえず一時的に（フェイスド）しまっておく箱で、劣化は大幅に食い止められるし、本格的な補修に移すまでの時間をかせぐことができる。こうした方法を導入することで、これまでわたしたちの書物の歴史的な特徴－図書館が保存すべき義務のひとつとしている－を破壊しつつけた補修作業に伴うリスクを回避できることになる。

さて、ここに補修をしようという本があるとすると、この本は補修後には「働く」義務がある。使用に耐え、その本に書かれている事柄を保護する義務が、この本にはある。こうした目的の遂行に失敗した例をあげよう。ベラムを本文材料につかった手写本だが、まさに絵に描いたような失敗例であ

る。ベラムは紙ではない。だから接着剤を与えたとき、接着剤に含まれる湿りけに対する反応は、紙のそれとは異なり、とても制御がむずかしい。そのため、ベラムを本文材料として使った本の背にニカワを引くと、ベラムはたちまちうねり、背は完全に柔軟性を失ってしまった。こうした本に対するダメージは過去 200年にわたって与えられてきたのだが、その経済的な損失たるや驚くべきもので、歴史的もしくは物理的なそれをはるかに上回る。いや、いまもお、こうした無茶な手当てが行われている。今年の初めにケンブリッジ・カレッジ図書館は手写本を補修に出した。それには一冊あたりの経費を35ポンドに抑えるようにという注文書きが添えられていた。で、一冊あたりの補修費用は35ポンドだった（実際のはなし、これらの手写本の全部にかかった経費を総合しても、一冊の手写本に対する適切な検討費用にも満たない）。おそらくケンブリッジ・カレッジはいつか将来、安く叩いた補修が原因となった損害を回復するには、何百ポンド、いやそれ以上の費用を投じなければならないことに気付くだろう。これらの本は製本された、だから本はそれなりに機能する。だがその製本技術たるや、並の技量の見習い製本工でもかくやと思いたくなるほどのものだ。

この種の処置が最近著しく増えつつある。これは保存に対しての関心のみが先行してしまったせいだ。それがどのような内容の仕事であるのかを認識することなく、ある種の処置が平気で行われている。さらに困ったことには、かつての仕事が払底しつつある製本業者や製本家が（保存に目覚めたまでは良かったのだが）、なまじ製本技術を身に付けているために、自らを保存技術者であると思ひ込み、他人にも思わせってしまうことだ。そして何ら資格もないままに、新しい電車に乗り遅れまいとして飛び乗ってしまう。こんなことがまかり通るといって、それ自体が、彼らに仕事を頼む側が保存のなんたるかを知らないということを雄弁に物語っている。この「保存技術者」に補修を頼むとどうなるか。おそらく彼は、自分が扱ったこともなく、知識の範囲に収まらぬ構造を持つ本（例えばリンプ・ベラムの本）でも、手慣れた技術でやっつけてしまうだろう。で、結果はといえば、取り扱うのに安全で容易どころか、開けば本は壊れ、安心して読むこともできないということになる。こんな本の構造が、どこかの

学校の保存教室とやらで生徒達に説明され、生徒達が「そうか、そういうやりかたが許されるわけですね？」などといひだしたらーもはや救いはない。彼らの保存教育は決定的な誤りに陥ると言わねばなるまい。

頼んだ仕事がまずい結果になったら、それは製本家と依頼主のどちらにも責任があると思ってまず間違いない。両方の失敗である。材料に対する鈍感さ、想像力のあきれほどの欠如。ある仕事を適切に仕上げるための予算がないからといって、だから経費を安く叩けば良いということにはならない。後々、安く上げたこの仕事の原因となる損害を回復するためには多大の出費を余儀なくされる。それでも回復すれば良いでないかと思われるかもしれない。ところが、一度ひどい手当てを施された本というのは、もはや回復不可能なことが多いのだ。なるほど現在の保存分野では、補修する場合には、後からでも元の状態に復せるような処置をすること、すなわち可逆性を維持するという原則が、徐々にではあるが確立されつつある。だが、まだ認識が浅いことがある。かつて行われた補修によるダメージは、もはや回復はできないということだ。そういう補修処置がずっと行われてきたのである。だから、現在残っている本のうち、以前になんら補修等の手が入らぬ本ーこれらが唯一、適切な保存の決定の対象となるものだと思ってい。歴史を経て今に残されたものは、一度消滅したら、もはや取りかえしはつかないのである。

歴史的証左の抹殺ーこれは正しい訓練の欠如、換言すれば無知から生ずる。保存技術者の作業台の上だけではない。保存の仕事に関する決定が行われるところならば、どこでも発生する。保存に関わる決定は、ある種の知識に立脚して行われるものだが、現在の図書館員養成のための促成講座は、この決定を行うに必須の知識を授けるには程遠い内容である。いや、仕事を頼まれる側の製本家とて威張れたものではない。自分が手を下す本がどのような価値をもっているのかを知っているだろうか。あるいは知るように努力しているだろうか。私達の貴重書のコレクションは、歴史的な破壊という受難の連続である。仔牛皮で装丁されたドネの詩集の初版本。これを、「その本の重要性に鑑みそれに適したものにするために」、金の箔を押したモロッコ革装丁にするなど有りえない

と思われるだろう。しかし有るのだ。これは、最近の4年の内で、われらが寺院図書館のひとつで実際に行われたことである。現在わずかに残っているロマネスク様式で製本された本。この製本を伴ってこそ、製本が守ってきた手写文書がわれわれに何かを語るのだが、再製本された。つまり破壊されたー。こんなことが日常茶飯事に行われたなど誰が信じよう。いや、過去の話どころか、現在ただ今もごく普通に行われているのである。

「何故に？」と首のひとつも傾けたくなる。「何故に、これほど見掛けおしで、不適切で、ダメージばかりを与える補修が、今もなお行われているのか？」。予算が無いーなるほど、だが充分な答えとはいえない。主たる理由、それは認識の欠如だ。これが主犯だ。確かに製本家にも問題がある。依頼された仕事を十分にこなすことができない。だが一方、製本家に仕事を出すのは誰なのだ？誰が製本家を選ぶのだ？仕事を発注する側で、製本家に対し、歴史的にも技術的にも適切な指示を与えられるひとがどのくらいいるのか。そうした情報は充分か。最終的な責任は図書館人にあることは論を待たない。彼らこそ保存手当て基準を示すべき人達なのだ。こうしたことを遂行するためには、訓練された保存技術者の専門知識とともに、図書館人自身も同等の専門的知識を必要とする。こうした専門知識を得るためには、もっと金を注ぎは良いというものではない。それは必要だが、もっと必要なのは保存技術者を養成するための正式な訓練計画と講座の設置であり（現在、それは無いのだから）、図書館人に保存知識を授ける訓練講座の設置である。保存に振り向けられる予算や人材は、あまりにも少ない。だが、これを拡充することが約束されなければ、またこれを効果的かつ慎重に図書館の資源の永遠の存続のために使うという約束がされなければ、わたしたちはもっと大きな約束、すなわち来るべき世代に本を手渡すという約束を破ることになる。いや、それだけならまだしも、来るべき世代に大きな問題を手渡すことになるのだ。

(了)



【解題と訳注】 木部 徹

以上は、ニコラス・ピックウッド (Nicolas Pickwood) の 'Conservation Binding' の全訳である。原文は、F. W.

Ratcliffがまとめた Preservation Policies and Conservation in British Libraries: Report of the Cambridge University Library Conservation Project, Library and Information Research Report 25 (British Library, 1984) の“Appendix 4— Papers read at the Cambridge Dissemination Seminar, 22 September 1983” (同書、pp.99-131) のひとつとして公表された。

ビックウッド (1949-) は、クリストファー・クラークソン、アンソニー・ケインズと並び、現代の英国を代表する書物のコンサーバター (Book Conservator) である。オックスフォードのチャーターハウスとウアーセスターの二つのカレッジで英文学を学び、オックスフォード大学でイラストレーターとしてのサッカレイを研究、博士号を得る—という変わった経歴を持つ。その後、シドニー・コッカレルと共にコンサベーション・バインディング (保存製本) という新しい概念を打ち立てたロジャー・パウエルのもとで修業を積み、1977年に独立した。現在フリーのコンサーバターとしてノルウィッチに工房を持ち、主としてナショナル・トラスト (National Trust—1895年に設立されたイングランド・ウェールズ・北アイルランドの史跡・自然保存のための民間団体) の仕事を行っている。

この‘Conservation Binding’をわたしが読んだのは、ラトクリフの『レポート』 (後述) が出た次の年の1985年だった。ビックウッドにはその以前から注目し、当時の日本の「保存」や「製本」のありかたに不満をもっていただけに、コンサベーション・バインディングという概念を明確に提示したこの論文に教えられるところが多々あり、いつか翻訳して紹介したいと思っていた。

まず、この論文が入ったラトクリフの『レポート』について述べたい。英国は書物の保存修復技術 (Conservation & Restoration) においては世界のトップをゆくが、しかし図書館や文書館全体の、あるいは国家的規模での「保存」 (Preservation) においては、例えば米国と比べて、はるかに遅れていた。世界的に高まる図書館等での保存運動を英国で開始するにはどうすればいいのか—こうした問題意識から、英国図書館協会、英国図書館、英国図書館情報サービス協議会等が協力し、「英国の図書館における資料保存の方針と現状の確認」と「図書館員や資料を扱う業務に従事するひと

のための、教育と訓練機関の確認」のために行った調査をまとめたのが、この『レポート』である。ケンブリッジ大学図書館資料保存プロジェクトとして行われ、同図書館のラトクリフ博士がまとめ役になったために『ラトクリフ・レポート』とも言われる。『レポート』の結論をきわめて簡単にまとめるならば、英国の図書館では「保存」は全く手付かずという状態であり、早期の対策が必要だ—ということになるだろうが、ともあれ、この『レポート』の後に、英国は英国図書館に国家保存室 (National Preservation Office) を設置し、各図書館ならびに国家規模での「保存」にのり出したわけで、英国の保存運動の期を画すことになった『レポート』だった。

この『レポート』は、実は、1985年に、日本で翻訳されている。『英国の図書館における資料保存対策—ケンブリッジ大学資料保存プロジェクト報告』という名で、「学術情報政策資料 No.18」として、文部省学術国際局学術情報課から昭和60年3月に「発行」されていた。翻訳は東京大学付属図書館関川雅彦氏に依頼した—とある。[部内資料 (仮訳)] という。部内とはもちろん「文部省学術国際局学術情報課」内である。144頁の写植文字のリッパな本になって、[部内資料 (仮訳)] である。一部の「部外」「関係者」には配布している。一般には入手できない。そういう種類のものであるらしい。わたしも今年この翻訳の存在を初めて知った。「部外」「関係者」から入手した。そして読んだ。

「コブデンとサンダーソンによって指導された、復活した初期の技術をもつ製本工が、過去の技術から、永続性のある新しい構造をどのように作るかを学びながら、製本の時に、未熟な様子を、多くの場合内気な様子を見せるということは美術製本の質の劣化に対する対応である。」

そこでわたしも勝手に訳したくなり、「試訳」した。それが本文の訳である。意識したところもある。しかし大筋に間違いはないはずだ。なによりもビックウッドの「怒り」は共有したつもりだ。なお[部内資料 (仮訳)] は、英国図書館の許諾を得て行った—とある。わたしの「試訳」は、英国図書館にも文部省学術国際局学術情報課にも、許諾を受けていない。

注1—Conservator を保存技術者と訳した。だがコンサーバターは単なる技術者ではないことは、冒頭で分かる。

注2—このふたつのことば、つまりコンサベーションとブリザベーションは訳が定まらない。前者を「保存」、後者を「保護」などとしてみたが、このふたつを入れ替えて使っているひともあるので、どうもすっきりと訳せない。だが、現在はコンサベーションは、修復すなわちレストレーションも含む、物理的な保存手当てを中心にしたものであり、ブリザベーションはこれらを包含し、保存計画の立案等も含む大きな概念であるらしい。

注3—「保存製本」の歴史は、アーツ・アンド・クラフツ運動に製本家として参画したコブデン＝サンダーソンの弟子のダグラス・コッカレルによって開始され、シドニー・コッカレルとロジャー・パウエルによって基盤が据えられ、1966年のフィレンツェの洪水とそれからの救援活動を契機として発展していった。ビックワードは、前述したようにパウエルとコッカレルの弟子でありケインズ、クラークソンもそうだ。

注4—米議会図書館の保存修復室は、パウエルの高弟で後にパートナーとなったピーター・ウォータースと彼のアシスタントだったクラークソンによって設置された。ダブリン・トリニティ・カレッジ図書館の保存施設はケインズによって設置された。ボードレアン図書館のそれはクラークソンによって設置された。テキサス大学図書館ハリーランサム人文科学センターの保存施設は、議会図書館修復室にいたドン・エザリントンによって設置された。いずれも今日の世界の「保存製本」の先導役を果たしている機関である。

注5—この会議については『通信』前号の4頁と注を参照。

注6—保存箱 (Phased Box) についてはわたしの個人誌『CAP: 本の保存のための海外ニュース月報』の今年4月号 9~16頁を参照。熱圧着紙 (ヒート・セット・ティッシュ) は、薄い和紙のような紙にアクリル系の接着剤を塗布したもので、補修しようというところに当て、上からアイロンをかけると接着剤が一瞬溶けて、補修紙が付く—というもの。簡便なだけでなく水を使えない紙等の補修ができる利点がある。ポリエステル・フィルム封入法は、不活性のプラスチックである熱可塑性ポリエステル樹脂フィルムで傷みのはげし

い文書をサンドイッチしてしまう方法。文書には直接フィルムを貼り付けず、文書の周囲のフィルムのところだけを貼るので、なかに封入したものの可逆性が保てる。議会図書館の修復室の開発。

注7—ビックワードはこの『レポート』に対して、保存製本の専門家の立場から意見を述べた。なによりも「質」だとかれの意見は、「量」で一気にやろうという傾向が見える英国の図書館の保存への取り組み方に対する批判となっている。

注8—クリート・ソーイング (Cleat Sewing) とは「接着剤製本のひとつで、からげ綴じさえ不可能な狭いノドの本の背にいくつか溝を切り、この溝と溝にひっかけるように綴じ糸を回しかけて全体を束ねる方法。機械で行う。」 (Carolyn Clark Morrow, Conservation Treatment Procedures, 1982 p.213)



図書館の修復現場から (4)

「続々・安易な改装思考の転換を！」

—私の名前は何だったの？

久芳 正和

●目録利用にも、ケジメが大切

膨大な数の資料を扱う図書館という所は、整理・利用上の都合から、“目録”を核として個々人がそして書物が動いているように思える。

そう考えると、世の中は“金”を核として人が、社会が動いているようにも見えてくる。だからと言って、すべての問題が“金”で解決されているのかというと、実際そうではない。確かに金は有り難いが、それは円滑に、より良い生活を営むための一つの道具でしかないだろう。

図書館の業務において、“目録”を中心に据えて多くの事柄に当て嵌めようとする姿勢は、一体“書物の保存”に限って考えた場合に、どこまで許されるのであろうか？

現在、国立国会図書館の洋図書は、英米目録規則第二版に従い分類されている。

“目録”は書物を利用しようとする人たちに、目的の書物